

# Feel the NCGM Plus



NCGM

国立研究開発法人  
国立国際医療研究センター

NCGM通信

2022.12.15

Vol.5

9月～11月（季刊）



## 11月8日、戸山地区で災害訓練を行いました

NCGMでは、災害発生時にどう対応するか、毎年訓練を行っています。今回の災害訓練では、勤務時間外（当直帯）に新宿区内の施設で爆発による火災が発生したことを想定して行いました。近隣住民にも被害があり、傷病者は数百人規模で発生したという情報を受け、速やかに時間外災害対策本部を防災センター内に設立しました。

災害発生直後からの時間外における初動対応、災害用テントの設営、患者の受入等の総合訓練、院内での中継システムの構築、地域関係機関との情報通信訓練を行いました。

写真左上から時計回りに：緑(軽症者)ブース、テント設営、現場指揮所、黄色(中等症者)ブースの様子

## 時間外初動対応

発災直後から本部引継ぎまでの間、災害の規模の把握し、各所と連携し傷病者の受入等の指揮を行いました。



防災センターで本部を立ち上げ



災害対応組織図をホワイトボードに貼る

## 災害用テントの設営

今回はCBRNE\*災害訓練のため、人間ドックセンター前のスペースでテント設営、備品設置、災害ベッド搬入、テント収納までを行いました。



新規購入したテントの設営を行った



テント内部に災害用ベッドを設置

## 総合訓練（患者の受入等）

傷病者（紙で症例提示） 100名以上のトリアージを行い、赤・黄色・緑・黒ブースで各自対応にあたりました。



傷病者受入のトリアージブース



重症者対応の赤ブース

## 本部機能移転・院内での中継システム構築

発災から約1時間後、幹部の参集が完了し、本部機能を防災センターから幹部会議室に移転。iPad 10台程度使用し、Teamsで各部署を中継、情報を収集し、指揮を行いました。



本部機能を移転した幹部会議室



各所をteamsでつなぎ連携

## 地域関係機関との情報通信訓練



地域関係機関と実際に通信訓練を行った

### 講評・振り返り

訓練後、各班・ブースから訓練に対する率直な意見が述べられました。

【杉山院長講評】

「チャット機能を使うことなどで、iPadをより効果的に使用できるのではないかと。また、今回導入した『本部と現場指揮所の機能を分ける』のであれば情報のやり取りをスムーズにする必要があると思います」

\*CBRNEとは[化学:Chemical]、[生物:Biological]、[放射性物質:Radiological]、[核:Nuclear]、[爆発物:Explosive]を指します。

- ①大規模災害の発生を想定し、ICTを使用した通信体制の構築と地域医療機関との災害医療対応の確認、
- ②東京都災害時医療救護活動ガイドライン（第2版）を用いた連絡体制の確認を目的として訓練しました。



## 11月2日、JHシンポジウム「コロナで変わる、コロナを変える」を開催しました

本シンポジウムの開会挨拶で中込和幸NCNP理事長は「タイトルの“コロナを変える”は、積極的にウイルスの特徴や実態を把握して克服するという意味でとらえることができます」と述べました。JHは6NCの疾患横断的な連携を一層深めるとともに、日本の臨床応用力の向上に極めて大きな役割を果たします。当日は、以下の4つの演題が発表されました。



JHを紹介する植木浩二郎 JH本部長  
(NCGM 糖尿病研究センター長)



【新型コロナウイルス感染症 これまでにわかったこと】河岡義裕 NCGM 国際ウイルス感染症研究センター長



北村 真吾  
【新型コロナ流行は6NCの診療にどう影響したのか】  
北村真吾 (国立精神・神経医療研究センター)



【コロナ禍におけるSARS-CoV-2抗体検査実用化に向けた産学連携研究】  
濱田哲暢  
(国立がん研究センター)



【新型コロナウイルス感染症はワクチン接種後になぜ急拡大したのか～抗体検査からみえたこと～】  
溝上哲也 NCGM 疫学・予防研究部長



国土理事長は閉会の挨拶で、「第8波に備えるという、この時期にこれまでの知見をまとめる本シンポジウムが開催できたことは、大変有意義なことです。多領域の専門家が協力して成果をあげる、そういう実例を本日は見せていただきました」と述べました。

本シンポジウムは[JHのホームページ](#)でアーカイブ配信しております。

### \*国立高度専門医療研究センター 医療研究連携推進本部 (JH)

6つの国立高度専門医療研究センター (NC) が世界最高水準の研究開発・医療を目指して新たなイノベーションを創出するために、6NCの資源・情報を集約し、それぞれの専門性を生かしつつ有機的・機能的連携を行うことをミッションとしています。



## オープンキャンパス、授業、大学校祭

国立看護大学校 成人看護学 教授／看護学部長 飯野京子

## 【オープンキャンパス】

本学のオープンキャンパスは、6月は対面で、8月と9月は感染状況を踏まえてオンラインでの開催となりました。内容は、学校説明会、模擬授業、個別相談、キャンパスツアーなどです。以下の写真は6月のオープンキャンパスの様子です。「本学の雰囲気わかり、学びたい意欲が高まった」などの感想が多く寄せられました。



## 【授業・演習・臨地実習】

今年度の学内授業は、厳重な感染対策のもと、基本的には対面で実施しています。多くの授業にNCGMの医療職の方から専門的な講義・演習をご担当いただいています。写真は災害看護論の一部で行っている救急救命法の授業演習風景です。救命蘇生法の具体的な手技をシミュレーターの人形を使って学習し、卒後を見据えて実践力を少しでも高められるように行っています。災害看護論では、NCGMの職員に、トリアージ演習の助言・講評、災害訓練・派遣活動等の講義を行っていただき、実践的な授業となりました。



## 【大学校祭】

10月8日（土）に大学校祭（オンライン）が開催されました。

テーマは、清芽共歓（せいめいきょうかん）。これは、清瀬の清、学生の若い力を表す芽、共に協力し歓ぶという意味を表現するものです。考案した実行委員に訊くと、自然の多い本学で、COVID-19流行下の状況乗り越え、学生全員で協力し、学校祭の成功を目指して取り組んでいくという実行委員の強い気持ちを込めるために、聡明で能力が高い様を表し、学生が日々目指す姿を表現する「精明強幹」という言葉をベースに作成したとのことでした。

大学校祭の様子は、本学のHPより閲覧できる内容もありますので、どうぞご覧ください。

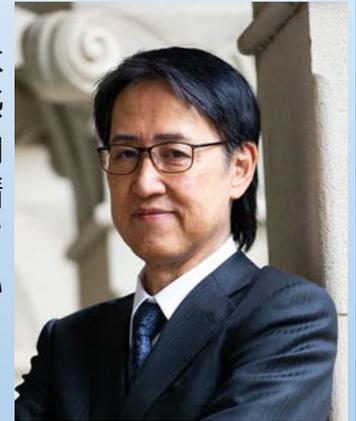


## 河岡義裕国際ウイルス感染症研究センター長が、第27回慶應医学賞を受賞し、11月25日授賞式が行われました

慶應医学賞は、1996年から医学・生命科学の領域において顕著かつ創造的な業績を挙げ、今後さらなる世界的な活躍が期待される研究者を慶應義塾が顕彰する賞です。

発表を受けて、河岡センター長は、次のようにコメントしています。「錚々たる先生方が受賞されてきた慶應医学賞の栄誉にあずかり、身に余る光栄に存じます。評価していただいた研究成果は、研究室の現在、そしてこれまでのメンバーならびに共同研究者の努力と、研究費をサポートしてくださった研究助成機関ならびにその職員の方々、大学の事務方、また研究者仲間など、多くの方々のご支援のお陰です。心から御礼を申し上げます。新型コロナウイルスによる未曾有の世界的困難に直面していますが、感染症の脅威は今後も増えることはあっても減ることはありません。感染症の克服に向けて、今後も精進し、努力していきたいと思えます。」

方々、大学の事務方、また研究者仲間など、多くの方々のご支援のお陰です。心から御礼を申し上げます。新型コロナウイルスによる未曾有の世界的困難に直面していますが、感染症の脅威は今後も増えることはあっても減ることはありません。感染症の克服に向けて、今後も精進し、努力していきたいと思えます。」



河岡義裕センター長は、インフルエンザウイルスを人工合成する画期的な技術を、世界で初めて開発しました。インフルエンザウイルスを自由自在に作製することによって、その感染、増殖、高病原性獲得機構、さらには薬剤耐性獲得機構について分子細胞レベルで明らかにすることに成功しました。

## 10月、センター病院に患者図書室「はこね山」がリニューアルオープンしました

患者さん、ご家族の皆さんのため、ソファなどが置かれ、より寛いで、読書ができる空間となりました。



(左から) 杉山院長、国土理事長、武井企画戦略局長

## 9月28日、米国保健福祉省 戦略的準備・対応管理局が国際感染症センター(DCC)を訪問しました

米国保健福祉省\*内にある戦略的準備・対応管理局\*\*から5名、そして、オブザーバーとして日本DMAT事務局と広島大学から各1名が、センター病院国際感染症センター(DCC)を訪問しました。一行は、初めにDCCの新感染症病棟にて、エボラ出血熱が疑われる患者搬送および診療対応のデモンストレーションを視察し、患者搬送の動線、搬送手

段、手順、並びに新感染症病棟設備等を大変熱心に観察されました。そして、森岡医長からNCGMにおける「国際的に脅威となり得る感染症の疑似症」への対応についての説明を受けたのち、今後の感染症危機管理における役割や課題について、率直に意見交換を行いました。

\*HHS: Department of Health and Human Service; \*\*ASPR: Administration for Strategic Preparedness and Response



エボラ出血熱疑い患者の搬送・診療デモンストレーションを熱心に見入る参加者たち



質問に答える大曲センター長



(前列左から) 石金正裕 医師、松澤幸正 医師、(2人おいて) 齋藤翔 医師 (後列左から) 森岡慎一郎 医長、氏家無限 医長、大曲貴夫 DCC長、武井貞治 企画戦略局長、杉山温人 院長、(3人おいて) 久保達彦 広島大学教授、豊國義樹 DMAT事務局員

## 11月14日満屋裕明研究所長が、令和4年度「熊本県近代文化功労者」に決定しました

熊本県は、熊本県出身者または在住者で、教育・学術・産業等あらゆる分野で近代文化の発展に貢献し、その功績が顕著である方を顕彰しており、これまでの顕彰者数は300名を超えます。

かつて「死の病」と恐れられたエイズ。満屋研究所長は、世界初のエイズ治療薬「AZT（アジトチミジン）」を開発しました。その後も「ジダノシン」「ザルシタビン」「ダルナビル」と相次いでエイズ治療薬を開発。「ダルナビル」は、途上国が特許料を払わずに使える医薬品として世界で初めて国連に登録され、世界中のエイズ感染者治療に大きく貢献しました。



満屋裕明研究所長

## 9月20日、救命救急センターの職員が牛込消防署から、表彰状を授与されました

9月9日の「救急の日」、「救急医療週間」に際して、救急患者の受け入れや、円滑な救急活動の確保等に積極的に取り組んだセンター病院 救命救急センター職員計6名が感謝状を授与されました。

山口圭二・牛込消防署長は、「救急の現場が本当に大変なときも受け入れていただき、とても感謝しています。救急隊員からもNCGMは本当にありがたい存在と聞いています」と述べました。



(左から) 木村昭夫救命救急センター長、堀内康平救命救急士、三浦由紗救命救急士、野山雄一看護師、寺田祥子MSW、船登有未医師、牛込消防署の山口署長、久我さん

# 9月30日、メディアセミナー「薬剤耐性(AMR)対策 最新動向2022」がオンラインで開催されました

AMR臨床リファレンスセンター(AMRCRC)は、厚生労働省委託事業として2017年に設立されました。今回のセミナーでは、6年を経過した「薬剤耐性(AMR)対策アクションプラン」の現在の取り組み状況、最近の話題、さらに日本における抗菌

菌薬使用状況、感染症対策関連サーベイランス、COVID-19が及ぼした影響、抗菌薬意識調査2022の結果と考察、推進月間の啓発ツールの紹介などさまざまな視点から発表しました。医療系メディアを中心に24名が参加しました。



## 「薬剤耐性(AMR)対策最近の話題」

AMRCRCセンター長  
大曲 貴夫



## 「AMR対策サーベイランスの現在地」

臨床疫学室 室長  
松永 展明



## 「COVID-19の影響と今後の展望」

薬剤疫学室 室長  
都築 慎也



## 「抗菌薬意識調査2022、啓発キャンペーン」

情報・教育支援室 室長  
藤友 結実子

薬剤耐性 (AMR) についてはこちらをご覧ください。

<https://amr.ncgm.go.jp/general/>



## NCGM職員の著書紹介

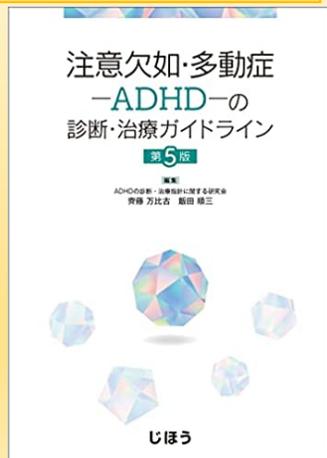
### 注意欠如・多動症-ADHD-の診断・治療ガイドライン 第5版

ADHDの診断・治療指針に関する研究会(編集) 齊藤 万比古(編集) 飯田 順三(編集)  
宇佐美 政英 国府台病院 児童精神科診療科長 ◆分担執筆

ADHD薬物療法や心理社会的治療の臨床経験が蓄積されてきたいま、子どものADHDにおける新たな診断・治療の方向性を明確にすべく、改訂されたのが本書です。第5版では、現在のADHDの臨床と研究の現状に即した現実的な内容にアップデートすることを目指し、実践的な検査法や評価尺度の開発・導入に関わる研究者や、各治

療法について深く関与している臨床家などへのアンケートをもとに新たなガイドラインを作成。豊富な解説が充実しています。

じほう  
2022年11月



## 9月5日、美代賢吾医療情報基盤センター長が、加藤厚生労働大臣主催の勉強会で講演を行いました

加藤勝信厚生労働大臣主催の勉強会で、加藤大臣の国政報告に続き、美代医療情報基盤センター長が「医療DXが拓く医療と日本の未来」というテーマで40分間の講演を行いました。

今年の経済財政運営と改革の基本方針（骨太の方針）で、医療DXが大きく取り上げられたこともあり、会場には250名、オンラインで150名の参加がありました。

美代センター長は、J-DREAMSを

講演する美代センター長。加藤大臣（写真左下）には、熱心に講演をお聞きいただきました

はじめとした大規模レジストリの紹介や電子カルテ情報の標準化の現状と方策について説明し、医療のデジタル化が医療機関を活性化することで、地域医療だけでなく地域そのものを支えることにも言及しました。



### Scientists' Field

## バイオバンク:ゲノム医療の実現に向けたゲノム解析基盤の構築

ゲノム医科学プロジェクト副プロジェクト長 河合洋介

当プロジェクトではゲノム解析を医療に応用するための研究をしています。様々なゲノム解析を行ってきており、令和2年には将来の疾患研究に必要な一般集団約1万人のゲノム解析を行いました。この研究では次世代シーケンサーを使った全ゲノムシーケンズ解析という手法を使いました。

現在主流の遺伝子検査は特定の遺伝子の型を決定するものですが、全ゲノムシーケンズ解析を使うと約30億文字からなるほぼ全てのゲノムの情報を取得できます。そのため従来の遺伝子検査では診断困難だった難病やがんへの応用が

期待されており、政府は全ゲノムシーケンズ解析を活用して難病やがんの診断や治療法の開発を行うことを政策的に推進しています。NCGMは、AMEDの研究班や厚生労働省の実証事業で難病ゲノム解析の拠点としての活動を開始しました。ゲノム医科学プロジェクトの研究はこれらの活動の推進に役立っています。

次世代シーケンサーの一つ



## 9月、矢野秀朗先生に、英国の電子カルテについてご説明 いただきました

医療情報基盤センター長 美代賢吾

9月に英国から一時帰国された矢野秀朗先生が、医療情報基盤センター（CMii；略称シーミ）にも来訪されました。CMiiからオンラインで、矢野先生が勤務されているサウサンプトン大学病院の電子カルテに接続し、普段お使いのシステム機能についてじっくりとご説明いただきました。また、英国の電子カルテの優れている点だけでなく、比較してわかった日本の電子カルテの良い点など、CMii職員と有意義なディスカッションを行うことができました。NCGMセンター病院では、来る2023年1月に次期電子カルテの更新を予定しています。

今回矢野先生からご紹介いただいた機能のなかで、NCGMにも有用なものについては、CMiiでも是非取り入れることを検討したいと思えます。

矢野先生、ありがとうございました。



矢野先生とCMii職員。後ろのディスプレイにはリモートでアクセスしたサウサンプトン大学の電子カルテ画面が表示されている

## 1型糖尿病患者に脳死ドナーからの膵島移植を実施しました センター病院 膵島移植科診療科長 霜田雅之

NCGMセンター病院では「再生医療等の安全性の確保等に関する法律」に基づく、第一種再生医療等技術である脳死・心停止ドナーからの同種膵島移植を行っています。本年某日、他県で発生した脳死ドナーから膵臓の提供を受け、院内にある細胞調製管理室にて膵島に加工し、内因性インスリンの枯渇した1型糖尿病患者に膵島移植を

実施しました。膵島は血管造影室にて経皮経肝的に門脈内に注入され、肝臓内に移植されました。移植後膵島からのインスリン分泌が開始されています。



NCGMセンター病院の細胞調製管理室内で無菌的に膵臓から膵島分離を実施。細胞調製管理室、検査部、薬剤部等の協力のもと行いました。

## 8月29日、タイ保健省の一行が、NCGMバイオバンク等を視察しました

タイ保健省医科学局局长をはじめとする9名がNCGMを視察に訪れました。タイ保健省は5万人の全ゲノムシーケンス解析を目指す Genomic Thailand プロジェクトで中心的な役割を果たしており、それに伴う国立バイオバンク設立を計画しています。そこで、1万人の全ゲノムシーケンス解析経験を有するナショナルセンター・バイオバンクネットワーク

(NCBN)の中央バイオバンク事務局、NCGMゲノム医科学プロジェクト（戸山）とNCGMバイオバンクを視察しました。

視察後は、武井貞治企画戦略局長も交え、NCGMとタイ保健省双方の新型コロナウイルス感染症対応の情報交換が行われるとともに、将来的な共同研究体制構築へ前向きな話し合いが行われました。



ゲノム医科学プロジェクト室を視察する一行（右端：徳永プロジェクト長）



意見交換を行う（写真手前：武井企画戦略局長）



左から5人目が、NCGM武井企画戦略局長、6人目が Dr. Supakit Sirilak（タイ保健省医科学局局长）、その右に徳永勝士ゲノム医科学プロジェクト長

## インドネシアの看護基礎教育課程における教育スキルの強化(高齢者看護)

国立看護大学校 老年看護学 教授／研究課程部長 綿貫成明

インドネシア共和国の高齢化率は約6.0%で、将来に向けた保健医療制度の変革に加え、高齢者看護の知識・技術・倫理観を備えた人材育成が求められています。筆者は、2020年度より国際医療協力局の「医療技術等国際展開推進事業」で、看護基礎教育課程の高齢者看護教育スキル強化に取り組んでおります。この事業は、臨床と教育が連携し、高齢者に特有の看護を学生に効果的に伝えるための実習指導スキル向上を目指しています。

コロナ禍で臨床現場が大変な中、臨地実習も一部制限され学内登校も制限されることがありました。看護大学校でも、オンラインや学内実習を併用しながら、学生の学びを継続できるよう取り組んできました。現場でしか学べない五感を通じた感覚やリアリティには代えられませんが、学内・オンラインでシミュレーション学習をし、現場の限られた時間で効果的・効率的に学べるよう、教員間で相談しながら試行錯誤してきました。

2021年度には、当事業で仮想現実Virtual Reality (VR) を用いた看護技術の動画2事例と指導案を作成しました。VRは通常の2D動画に比べ臨場感があり、情報を能動的に探すことで現実に近い感覚を持てるメリットがあるため、実習の前準備や補完として役立ち

ます。VR動画教材のシナリオ作成では看護観や教育観、看護技術の根拠を何度も話し合い、そのプロセスが参加メンバーの教育能力の向上に繋がりました。

2022年度は、この教材を用いた模擬授業を展開し、今後の普及・発展に向けた評価をしています。今後、感染状況に応じて訪日研修を再開しつつ、デジタル技術をさらに併用・活用することで教育の質を高め、技術の普及を促進していきたいと考えています。

プロジェクトの成果：



2021年度のインドネシアとのWebinarでVR教材の作成について発表しました。



実際に作成したVR動画の一部です。



WebinarでVR動画を視聴しているところです。

## 8月13日、NCGMとインドネシアのSHGは、MoUを締結し、臨床研究セミナーをAMEDと共催しました

NCGMは、インドネシア最大規模（全国で42病院と31の診療所を運営）、かつ優れた医療を提供するシロアム病院グループ（SHG：Siloam Hospitals Group）と臨床研究協力に関する覚書（MOU）を締結しました。MOUの署名にはNCGM臨床研究センターの杉浦互センター長とSHGのグレース・フレリータ所長が立ち会いました。

また、SHGに新設された臨床研究部を立ち上げるため、NCGM—AMED—シロアム共催セミナー「臨床研究に対する意識改革とコミットメント強化、将来の医療変革に向けて」が開催されました。

杉浦臨床研究センター長は「イン

ドネシアには、臨床研究を通じグローバルヘルスに貢献できるポテンシャルがあると考えます。質の高い臨床研究実施に向け、医療従事者や研究者の意識を高めることは重要性です。シロアム病院グループ臨床研究部門の設立・強化に向け、支援をしていきたいと思ひます」と述べました。

この導入イベントのフォローアップとして10月にSHGでGCP（Good Clinical Practice）ワークショップの開催を予定しています。なお、本イベントの様子は、同国の全国ネットのテレビ局3社で報道されました。



（左から）シブライアン研究員（DIT）、宮脇主幹（AMED）、園田研究員（DIT）、ニラサリ博士（SHG）、スリアプラナタ医師（MRIN）、フレリータ医師（SHG）、ユスフ教授（MRIN）、杉浦センター長（CCS）、飯山部長（DIT）、ルーシー医師（SHG）、ジョー医師（MRIN）、ギンディング医師（MRIN）



杉浦センター長によるCCSの活動の説明



飯山部長によるパネルディスカッション

## 8月3日、米国笹川平和財団の代表団(SEED)が、NCGMを訪問しました

米国笹川平和財団は、日米間の相互理解の深化、および関係強化を目的とする米国ワシントンD.C.に所在する非営利団体です。

同財団は、8月1日から5日まで米国の感染症専門家(公衆衛生専門家)9人を日本に派遣し、3日NCGMを訪問しました。

日本の新型コロナウイルス感染対応は、米国の専門家より高い評価を得ており、日本のCOVID-19対応についての見識を深めると同時に今後の感染症対応における連携について模索することを目的として、意見交換を行いました。(SEED: Sasakawa USA Emerging Experts Delegation)



米国連邦政府、州政府、メディア、シンクタンクの公衆衛生専門家で構成された代表団は、大曲国際感染症センター長と国土典宏理事長から、NCGMにおけるCOVID-19への取り組みについて説明を受け、活発な質疑応答を繰り返しました。

左から2人目が、武井企画戦略局長、大曲センター長、国土理事長、米国笹川平和財団の会長・理事長を務める秋元諭宏氏

### NCGM職員の著書紹介

#### 相談事例から考える研究倫理コンサルテーション

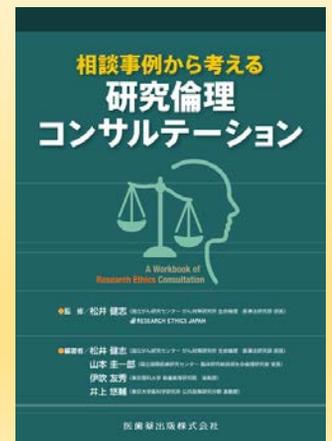
松井健志◆監修・編著

生命倫理研究室長 山本圭一郎ほか◆編著

わが国の研究倫理の第一級専門家チームによる、真に役立つ研究倫理ワークブックの決定版です。研究倫理コンサルタントを目指す方々はもちろん、研究倫理審査の任にあたる倫理審査委員会委員や事務局スタッフ、あるいは、実際に医学系研究を立案・実施されている研究者や医療従事者、医学系研究者を将来目指す学生の方々に

も必須の一冊。執筆者として、高島響子主任研究員も参加しました。

医歯薬出版  
2022年8月



Scientists' Field

## 脂肪肝の発症メカニズムについて、新たな発見を論文として発表しました

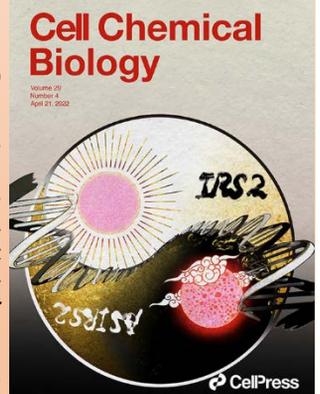
糖尿病研究センター・分子糖尿病医学研究部 栗澤元晴

私たちの遺伝情報は4種類の塩基からなる「文字」で表され、DNAに書き込まれています。DNAが対になる二本の鎖でできていて、それが二重らせんを作っているのは有名です。ではこの二本のDNA鎖のうち、どちらに遺伝情報が書き込まれているか知っていますか？実は二本は写真とネガ、表と裏のような関係にあり、情報が書き込まれているのは普通どちらかの鎖だけで、その相手型の鎖は鏡文字と呼ぶべき配列になっています。もちろん鏡文字ですから、その配列の方を読んでも正しい遺伝子になりません。

ところが最近、表の配列と同時に鏡文字からも分子が作られ、両者がともに意味を持つというケースが見つかってきました。DNAとい

う「紙」を無駄にせず両面に文章を書くようなエコなやり方です。そのようなケースの一つとして私たちは、インスリンの働きを伝える重要な分子IRS2に「鏡文字」にあたるRNA分子が存在し、二つの遺伝子の量がお互いに変化することで糖尿病と脂肪肝を引き起こすメカニズムになっていることを発見しました。

このことを私たちは陰陽太極図をモチーフに、表と裏にあたる二つの遺伝子が同時に働く様としてイラストで示し、*Cell Chemical Biology*という雑誌の表紙（2022年4月号）を飾りました。



## 8月8日、イタリアの著名な肝胆膵外科医 Guido Trozilli 教授に講演していただきました

国土理事長の友人でProf. Guido Trozilliにセンター病院にお越しいただき、センター病院外科のメンバー向けにご講演いただきました。

トルジリ教授は、悪性肝臓腫瘍の精密外科分野での外科的および科学的活動で、世界的に知られている先生です。



前列左から、清松知充科長、国土理事長、トルジリ教授、竹村信行科長、北川大科長

## 8月10日、狩野繁之 熱帯医学・マラリア研究部部長が「令和4年度 外務大臣表彰」を受けました



写真提供：外務省

外務大臣表彰は、国際関係の分野で活躍し、わが国と諸外国との友好親善関係の増進に多大な貢献をしている個人・団体のうち、特に顕著な功績のあった活動を称えるとともに、それに対する一層の理解と支持を国民の皆様をお願いすることを目的としています。

狩野部長は、熱帯感染症の研究者として、20年以上にわたり開発途上国のマラリア政策立案に貢献し、国内外の学術発展や人材育成にも尽力しました。また、海外在留邦人のマラリア事案の安全・安心に大きく貢献しているとして、林芳正外務大臣から直接、表彰状ならびに副賞を授与されました。



## 2022年1月に開設された国府台病院の摂食障害『相談ほっとライン』への相談件数が約600人分に上りました

全国の幅広い地域を対象にした無料の電話相談窓口設置は初めての取り組みです。摂食障害に詳しい看護師が当事者や家族らから相談を聞き取ります。9月末までに相談件数は当事者593人分になりました。河合啓介心療内科診療科長は「医療機関と治療方針が合わずに苦しむ患者が多い現状も明らかになった」と言い、その上で「摂食障害は当事者が病気であると認識していないケースも多く、一人で治すのは難しい。正しい知識やさまざまな選択肢があることを伝

え、専門家の支援につなげたい」と話します。「相談ほっとライン」は、火、木、金曜日の午前9時～午後3時（047・710・8869）。



河合啓介 心療内科診療科長

## 8月3日、iGHPでは、世界銀行のJuan Pablo Uribe氏による特別セミナーを開催しました

グローバルヘルス政策研究センター（iGHP）では、世界銀行保健・栄養・人口グローバルディレクターのJuan Pablo Uribe氏をお迎えし、世界銀行のグローバルヘルス分野における役割について特別セミナー（ハイブリッド形式）を開催しました。

当日は磯iGHPセンター長の開会挨拶で始まり、講演では世界銀行のミッションに始まり、戦後の世界銀行と日本の関わりの歴史（戦後被援助国から主要な援助国となったモデル国としての日本）と、過去10年間における世界銀行とヘルス分野の関わりや出資状況について触れたのちに、COVID-19パンデミックへの対応や新型コロナワクチ

ン調達への支援、そして最後に世界銀行のグローバルヘルス戦略についてお話いただきました。

質疑応答では、グローバルヘルス分野における世界銀行と日本やiGHPとの今後の連携についてや、パンデミックの経験を通じて今後どのようなヘルスシステムを構築していくべきか、世界銀行で活躍されるヘルス領域の専門家の活動内容とその醍醐味など幅広いテーマについて意見交換が行われました。

最後にはNCGMを代表して池田国際医療協力局長が閉会挨拶を述べました。オンライン参加の方も含めると総勢100名以上の方にご参加いただき、大変盛況な会となりました。



講演するUribe氏



(左から)池田国際医療協力局長、磯iGHPセンター長、Uribe氏、藤田則子部長、世界銀行 井上肇氏

## 国際看護学実習を通じて開発途上国の保健医療や看護についての理解を深めました

国立看護大学校 及川みゆき（講師）

国立看護大学校はベトナム・ハイズオン医療技術大学（HMTU）協力の下、例年4年生が渡航しての国際看護学実習を行ってききましたが、2019年以降中断されています。そこで今年は様々な角度からベトナムを取り上げ、学生が多面的な視野で開発途上国の方々が置かれている健康課題や必要な看護を深める機会としました。

国内では在留ベトナム人支援やNCGM国際診療部の活動等、ベトナムからはオンラインにて保健省、看護協会、現地を拠点に農村開発支援をしている日本のNPO法人の講義、そしてHMTU学生とのグループ協議も行い、日越の保健医療や看護の共通点相違点を理解するとともに、外国籍の患者への看護の在り方を考察しました。

4年生が病棟看護師の一員となる日も近く、この実習の学びが活かせることを期待しています。



写真は、国際看護学実習の様子  
JICA地球ひろば体験



看護大学生による  
実習総括プレゼン



HMTU学生とオンラインでのグループ協議の様子

ベトナムからオンラインで講義を受ける看護大の学生



## MINCの会(海外医療機器の最新動向勉強会)について

センター病院副院長 丸岡 豊



本会は医工連携室と日本医工ものづくりコモンズとの共催で、海外医療機器の最新動向を勉強する会です。新規医療機器開発には外国人の発想を知り、世界の潮流を感じることも重要です。

選定された海外の医療機器について当院医師が専門的見地から解説を行います。辛辣なコメントが

出ることもあり、それがかえって好評を博しています。

本会も既に23回を数え、当初は各省庁やAMED、PMDAや製薬会社、医療機器会社の方などを対象としておりましたが、コロナ禍のためWEB開催となったことで、日本全国から多くの研究者も参加するようになり、毎回活発な議論がなされています。皆さんもぜひこの会にご参加ください。

MINCとは、「Medical Innovation by NCGM and Commons」の略です。

[https://www.ikou-commons.com/category/ctg\\_education/ctg\\_s\\_group/](https://www.ikou-commons.com/category/ctg_education/ctg_s_group/)



## 8月4日に、第3回エキスパートセミナーが行われました

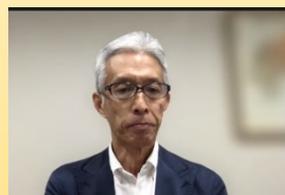
センター病院消化器外科診療部門長 山田和彦

本会は、NCGM外科がテーマを決めてその道のトップランナーに講演をしていただいている研究会です。今回は、NCGM出身で海外で活躍されている2名の外科医が講演されました。

オーストラリアのAustin病院の吉野理先生には、Mentorshipの重要

性を、英国のSouthampton大学病院の矢野秀朗先生には、日英の医療制度の違いや外科医の待遇などについてご講演いただきました。海外を志す医師にとっても刺激的な内容であったと思います。

『英国・サウサンプトンだより  
- イギリス外科医の働き方、コロナへの対応など』  
矢野秀朗先生



『医師としてのキャリアの積み方 - 日米豪での経験をもとに』  
吉野理先生



## 2022年、研究所に、3つのテニュアトラック研究部が誕生しました！

テニュアトラック研究部は、若手研究者（30～40代）を部長に迎え、自立して活躍できる機会を提供するため、創設されました。皆様方との共同研究が発展することを祈念し、紹介します。

### ➤ 脂質生命科学研究所 テニュアトラック部長 進藤英雄

～生体膜リン脂質を操作して、機能解明から治療法開発を目指す！～をモットーに脂質基礎研究を行っています。各種膜リン脂質操作マウスやヒト検体を対象に、リピドミクスに5台の質量分析計を駆使しています。



写真前列中央：進藤英雄部長

### ➤ 感染病態研究部 テニュアトラック部長 杉山真也（すぎやままさや）

当研究部では、ウイルス性肝炎や新型コロナウイルス感染症の病態解明と治療薬の開発を行って参ります。臨床に還元できる研究を目標に研究開発を進めていく所存です。



写真左：杉山真也部長

### ➤ ウイルス構造機能研究部 テニュアトラック部長 町田晋一

当研究部では、クライオ電子顕微鏡を用いて、ウイルスや様々な疾患の原因タンパク質の立体構造を明らかにしていきます。さらに、得られた構造データをもとに、治療薬の開発を目指します。



写真：町田晋一部長

## 7月30日、千葉県内視鏡実技研究会で豚モデルを使用した大腸ESDのwebレクチャーを行いました

国府台病院 消化器内科診療科長 矢田智之

本会は、県内の若手から中堅の消化器内視鏡医が内視鏡診断や技術を学ぶ場として非常に人気のある会です。コロナの感染急拡大のためハンズオンは中止となってしまいましたが、豚モデルを使用した大腸ESD（内視鏡的粘膜下層剥離術）のwebレクチャーを行いました。ESDは早期消化管がんに対する内視鏡治療となりますが、消化器内視鏡手技の中で最も難易度の高い手技のひとつです。今回はより細かい部分が伝わるように、内視鏡画面だけでなく手元の動きや全体のディスカッションの様子も同時にライブ配信する形をとりました。

聴講された先生方からは『内視鏡

の細かい動きも解説してもらい非常に勉強になった』『同じ形式で違うタイプの高周波ナイフでのレクチャーもしてもらいたい』と大変好評でした。

内視鏡技術を伝えるためには対面でのハンズオンで手取り足取り教えるのがベストですが、コロナ禍においては今回のような形式も十分に効果があるものと手応えを感じました。今後も後進の育成に力を注いでいきたいと思えます。



写真中央（術者）：矢田智之

## 7月21日、パプアニューギニア国の感染対策ポリシー2021-2030が発表されました

国際感染症センター（DCC）は、世界保健機関 西太平洋事務局（WPRO）から依頼を受け、WHO コラボレーティングセンターの業務として同ポリシー作成のサポートを継続的に行ってきました。

2018年と2019年にセンター病院の森岡慎一郎医師がパプアニューギニア国内の7医療機関を視察し、感染対策に関する助言や教育的トレーニングを行い、同国内の医療機関における感染対策の課題や問題点を同定しました。そのうえで、現場の状況を考慮した感染対策ポ

リシーの最終ドラフト案を提出し、このたび10年計画が発表されました。DCCでは引き続き、WPROなどと共に国外のIPC（Infection Prevention and Control）対策にも協力してまいります！



PNG国の医療機関で活動する森岡医師

## 国際医療協力局グローバルヘルスレポート 在外職員奮闘記！！

ザンビア共和国 Vol.12

国際協力機構（JICA）ザンビア共和国・ルサカ郡総合病院運営管理能力強化プロジェクト（カシオペア・プロジェクト）  
チーフアドバイザー 法月正太郎（医師）

ザンビアでは、昨年からは医療保険制度が始まり、援助と税金で運用されていた公立病院が、保険診療で質の高い医療を目指す時代に変革しています。

本プロジェクトは、日本の無償資金協力で建てられた首都ルサカの5つの二次レベル病院（帝王切開が可能なレベル）において、運営管理能力を強化し、州保健局、保健省との連携を強化し、各論として感染管理、薬剤・医療機材の管理強化も行っています。

私は、9名のスタッフと共にプロジェクト全体の運営を行っていま

す。ザンビアとNCGMは17年の歴史があり、英語圏アフリカのフィールドとNCGMを繋ぎつつ、誰一人取り残さないため、各病院が自らガバナンス体制を強化し、ザンビアの人々と共に質の高い医療を提供するために努力していきたいと考えています。



村の売店の軒先で行ったコロナワクチンキャンペーンに参加

## 在外職員奮闘記！！

セネガル共和国 Vol.13

国際協力機構（JICA）セネガル共和国・母子保健サービス改善プロジェクトフェーズ3  
チーフアドバイザー 本田真梨（医師）

私は、2021年11月にセネガルに赴任しました。セネガルはアフリカ大陸最西端に位置します。西アフリカの中心国ですが、妊産婦や新生児の死亡率は依然として高く、特に最近では医療施設におけるサービスの質が課題とされています。

プロジェクトでは「最高の健康状態を享受するための母親・新生児・その家族への敬意を中心とする質の高いケアを支援し、発展させるための包括的な仕組み」の普及に取り組んでいます。現場で働く助産師達に妊産婦・新生児が尊重されたケアについて研修し、また各州において州医務局を中心と

した、病院、保健センター、保健人材養成校、大学等の連携を強化することで、尊重されたケアの定着と発展を目指します。現地の相手と協力しながら、セネガルの母子により良いケアを提供できるよう努めてまいります。



サンルイ州の医療従事者研修にて  
前列左 本田医師

## 国際医療協力局グローバルヘルスレポート 在外職員奮闘記！！

モンゴル国

Vol.14

国際協力機構（JICA）モンゴル国・医師及び看護師の卒後研修強化プロジェクト

チーフアドバイザー 明石秀親（医師）

2022年3月末にモンゴルに着任してから早や8か月が過ぎました。6月の『ナーダム』という、モンゴル相撲や弓矢の大会、子供達による競馬などが行われた夏祭りも過ぎ、今は11月、急速に寒くなって、朝マイナス10度台のことも多くなりました。

本プロジェクトでは、医師、そして看護師や助産師の卒後研修能力を高めるべく、その仕組み作りや指導者向け研修会（TOT）、医師の研修施設を増やすための説明会などを行なっています。

医師分野ではTOTをモンゴルの方が自分達で進められるようになりました。特に地方の指導医達の中

には講義以外の研修医の指導法を知らない場合もあり、そのため症例を使った検討会や教育的な回診のやり方、あるいは外国語の論文を使った抄読会のやり方などについての講義を日本側がやるということも適宜行なっています。



医師向けTOTで“緑のキリン”（人形）を患者さんに見立てて、症例検討会のやり方を実演中

## 7月21日、国際医療協力局の池本めぐみ助産師がモンゴル国の「国立医科学大学80周年名誉勲章」を受勲しました

この名誉勲章は、モンゴル国立医科学大学80周年を記念し、同国における教育、科学、医療分野で著しい功績を上げたことを評価し、授与される勲章です。

池本助産師は、2021年4月JICAモンゴルにおける医師及び看護師の卒後研修強化プロジェクト長期派遣専門家として着任しました。池本助産師は「この勲章はモンゴルの保健医療分野を少しでも良くしたい、そのために必要な医療人材の卒後研修の強化に貢献したい、との思いで活動を進めているモンゴルの保健医療分野の皆さま、日

本の専門家たち、現在までプロジェクトに関わってくださったすべてのメンバーに贈られたものです。今後も、モンゴルの保健医療の向上のため頑張ってもらいます」と感謝と抱負の言葉を述べています。



池本助産師とN.Khurelbaatar学長

## 7月12日、NCGM-PMDA共催シンポジウム～ARISE-PMDA Joint symposium for Asian Clinical Trial～が開催されました

NCGMは、日本医療研究開発機構（AMED）の支援を受け、アジアにおける国際共同臨床試験を推進するための基盤であるARO Alliance for ASEAN and East Asia（ARISE）を令和3年12月に発足させました。アジアにおける規制に準拠した質の高い国際共同臨床試験を実施し、薬事承認を加速化するには、各国のアカデミアだけでなく薬事規制当局との連携が必要不可欠です。このため、アジアの規制調和を推進する 医薬品医療機器総合機構（PMDA）と共同で本シンポジウムを開催し、15カ国から総勢508名が参加しました。

NCGMからはARISEを紹介しました。また、製薬企業、研究機関、薬事規制当局の各立場から「アジアの臨床試験における Good Clinical Practice（GCP）の推進」、

および「COVID-19治療薬やワクチンの早期開発・アクセス」に向けた問題点や取り組みを発表し、パネルディスカッションを行いました。杉浦臨床研究センター長は最後のシンポジウムサマリーで次のように述べました。

「アジアでの臨床試験は大きな成長の可能性があり、ARISEのような研究プラットフォームを活用して試験を推進できます。国際的な多施設共同臨床試験の効果的・効率的な実施に向け、ICH（医薬品規制調和国際会議）の規制を遵守することは重要であり、各国のベストプラクティスを共有することは、患者さんにCOVID-19のワクチンや治療薬を早く届ける上で有意義です。そのためには、規制当局、アカデミア、産業界と協力して、アジアにおけるエビデンスを創出していきたいと思えます。」



NCGM 国土典宏理事長



PMDA 藤原康弘理事長



杉浦 亙 臨床研究センター長

## 研修医の窓

### シミュレーションセンターで日々研鑽しています センター病院 研修医2年目・中村 勇貴

センター院地下1階食堂横のシミュレーションセンターには、末梢静脈ルートモデルや挿管モデルなど、多くの手技練習シミュレーターが充実しています。特に研修医で人気なのが腹腔鏡ドライボックスです。(現在実に20人以上の初期研修医が練習中です！)

鉗子を使って運針結紮の練習をしたり、中には折り紙を使って鶴を折ったりする者もいます。外科や婦人科の先生方にご指導をいただきながら、研修医同士でも互いの

練習動画を共有し改善点を指摘しあうなど、来るべき執刀の機会に向けて切磋琢磨しております。



熱心に練習中の研修医

## 豊かな自然に囲まれた「国府台」から

### 国府台病院 研修医1年目・小泉 諒

「国府台」の地名の由来には、ちょっとした伝説があります。日本武尊(やまとたけるのみこと)が東征に赴く際、一羽のコウノトリが大群の渡渉を手助けし、その褒美に「鴻之台」と名付けられた…というものです。今ではコウノトリを拝むことはできませんが、神話の時代から変わらず国府台周辺は豊かな自然に囲まれています。

NCGM国府台病院は、初期研修病院という目で見ても、かなりオリジナリティに溢れています。まず精神科系診療科が非常に充実している点。そして精神科、心療内科に加え児童精神科を自院で研修できる病院は、全国的に見ても数少ないことでしょう。また5つもの内科領域が集まり、統合内科という形で臨床活動に携わっている点

も、診療科の垣根を越えた総合的な医療を実現しているという点で特徴的です。

現在、国府台病院の初期研修医は20名。充実した環境で将来の医療を担う人材となり、大きく羽ばたけるよう、先生方の手厚いご指導の下、研鑽を積む毎日です。



研修医の仲間と(後列右端が筆者)

## 研修医の窓

### 研修医1年目でスクラブを制作しました！

センター病院 研修医1年目・平岩 茉優

研修医1年目でスクラブを作成し、私はデザインを担当しました。

最初にスクラブ制作チームで協議して、背面に何か固有のデザインを描いて挿し入れることになり、初めに思いついたのは救急車や心電図などの、医療と結びつく普遍的なモチーフでした。決して悪くない案でしたが、もっと「NCGMの同期」らしいデザインにしたいという思いもありました。研修が終わってからも、他でもないNCGMの研修同期と作ったスクラブだと一目見て分かるようなデザインにしたい、と。

ある日の業務中、電子カルテの口グインページに掲載された当院の写真を見てふと思いつきました。これをデフォルメすればNCGMらしく、他の学年とは被らない固有

のデザインになるのでは？ その後も簡略化の程度や線の太さなどの微調整はありましたが、概ねこのような経緯で生まれたのが、私たちの同期スクラブです。同期の皆にも好評で、着用している同期を見るたび、デザイン係としても冥利に尽きる思いです。このスクラブを見た時に良い思い出として想起されるような研修にすべく、これからも同期の皆と切磋琢磨していきます。



## 社会人として半年を過ごしてみて

センター病院 研修医1年目・鳥谷 博昭

4月1日に入職して、既に半年以上が経過しました。私は入職前には上京をすることへの不安など、様々な不安を抱えていました。そんな中、入職した日のことを今でも鮮明に覚えています。しかし今ではそのような悩みはなくなりました。それは同期の先生達の社交性や積極性のおかげで、4月から様々な悩みなどの共有ができたからだと思います。これは、私がこの病院で研修医生活をスタートできて良かったと強く思う理由の一つです。

私は歯科医師ということもあり、長い目で見ると同期の先生方と同じ職場で仕事をする時間はあっという間です。センター病院で研修する2年間で、研修医時代の同期というだけでなく、生涯繋がっていきける同期になっていきたいと思っています。

入職時に眺めた  
戸山の桜



## 北海道の大自然を感じてみよう！

センター病院小児科子どもの療養環境を考えるWG一同



小児科病棟では、北海道の難病の子どもたちを支援する『そらぷちキッズキャンプ』様から機器をお借りして、VRイベントを行いました。VRゴーグルをつけると、北海道滝川市にあるそらぷちキッズキャンプを取り囲む大自然が目の前に広がります。

映像には夏バージョンと冬バージョンがあり、緑豊かな場面から真っ白な銀世界まで雄大な景色と、馬やキツネといった動物たちとの触れ合いも疑似体験できました。

さらに没入感を得られるように森の香りのアロマを使ったり、風を起こしたり、冷たいタオルに触ったりと少しだけドキドキする工夫も…

VRイベントで、お子さんは北海道ならではの感覚を楽しむとともに、スタッフがVR体験している時には、お子さんが場面に合わせたいたずらをし、驚いて叫び声をあげる大人の反応を楽しんでいました。

ゴーグルをつけられない小さいお子さんは、スクリーンに映った動物たちに疑似エサやり体験を何度も楽しんでいました。

VR映像が終わった後は、みんなでプレイルームの床に座って座談会。「先生は、昔こんなことがあったんだ…」「私の家族はね…」

誰が始めたでもなく、自然とそれぞれが思い思いの話をして、まったりとした交流の時間を過ごしました。

東京ではなかなか感じられないような、刺激の多い体験をありがとうございました！



本号に掲載の集合写真等は、撮影時のみマスクを外しています。



企画・発行：  
NCGM 広報企画室



<https://www.ncgm.go.jp/aboutus/FeeltheNCGM Plus/index.html>

バックナンバーはこちらからご覧いただけます。